

Q：音読の教材や指導内容について、効果的な手立てを教えてください。

A：音読は学習指導要領「C 読むこと」領域の指導事項で、次のように示されています。

第1学年及び第2学年…語のまとまりや言葉の響きなどに気をつけて音読すること。

第3学年及び第4学年…内容の中心や場面の様子がよく分かるように音読すること。

第5学年及び第6学年…自分の思いや考えが伝わるように音読や朗読をすること。

従って、音読は「A 話すこと・聞くこと」領域と関連付けながらも、「C 読むこと」領域の能力を育てるための指導であることを前提にして進めていきましょう。

アドバイス：

①よい音読をするための観点（技能）を理解させましょう

単にすらすら読むことだけでなく、よい音読をするための観点（技能）を子どもたちに分かる言葉や実演などで理解させていきましょう。

- 観点の例としては
- ・正しく読むこと
 - ・声の大きさ，速さ（緩急），強弱，抑揚，声質
 - ・間の取り方，目線，表情

②読ませ方を工夫しましょう

音読は日常的に行われる活動であり、ともするとマンネリ化することが考えられます。例えば「～回読みなさい」だけでは興味をもって音読を続けさせることは難しく、また「人物の気持ちを考えながら読みましょう」では曖昧すぎて、どう音読につなげていくのかが分かりにくいでしょう。以下の例を参考に、マンネリ化からの脱却を図り、継続して取り組めるようにしていきましょう。

- ・人数に変化をつける…いつも一人で読むのではなく、一行ごとに人を増やして読む，二人組で交代で読む，列で読む，学級全体を二つに分けて読む，子どもたちが自分の読みたい箇所を選び，そこになったら立ち上がって読むなど，様々なバリエーションを考える。
- ・速さに変化をつける…「速読」やどこまで速く読めるかを競う。
- ・読む量に変化をつける…「。」読み，一文読み，段落読み，など。

多くの子どもに読ませたい場合，文章のまとまりを考えさせたい場合など，ねらいや目的に応じて変えていく。登場人物の台詞と地の文で役割読みをさせることもできる。

③音読を発展させましょう

特に高学年では，朗読や朗読劇，群読といった活動も学習指導要領に取り上げられています。他にも，暗唱や語りは音読を発展させた活動であると言えるでしょう。聞き手意識をより強く持たせ，自分なりに理解したり解釈したりしたこと，感動などを他者に届ける力を培うことがねらいになります。

※ 音読は子どもたちが意欲的に取り組むことのできる学習活動です。様々なやり方を工夫し，読み取ったことを言葉にのせて交流する，楽しい雰囲気での授業を目指しましょう。子どもたちが楽しみながら音読をすれば，「読むこと」の能力も確実に伸ばしていくはずですよ。